

# 現代韓国語の「다가 (taka)」のイメージ・スキーマと意味拡張

李 英蘭  
東京大学

## 1.はじめに

本稿は、現代韓国語において多様な意味・機能として現れる「다가 (taka)」を、イメージ・スキーマを用いて分析し、「다가」の本質的意味・機能を明らかにすることを目的としている。

「다가」は、次の (1) ～ (5) のように 5 つの文法的位置づけをもって現れる。

- |                                |              |
|--------------------------------|--------------|
| (1) 가방은 테이블에 <u>다가</u> 놔 뒀.    | ← 補助詞        |
| (かばんはテーブルに置いといて。)              |              |
| (2) 창문에는 꽃병을 가져 <u>다가</u> 놓았다. | ← 連結語尾「-어다가」 |
| (窓には花瓶を持ってきて置いた。)              |              |
| (3) 타로가 하나코에게 <u>다가</u> 왔다.    | ← 複合動詞       |
| (太郎が花子に近づいてきた。)                |              |
| (4) 의자를 창 쪽으로 <u>다가</u> 두어라.   | ← 本動詞        |
| (椅子を窓の方へ近づけておいて。)              |              |
| (5) 학교에 가 <u>다가</u> 타로를 만났다.   | ← 連結語尾「-다가」  |
| (学校に行く途中、太郎に会った。)              |              |

まず、(1) の「다가」は、格助詞「에 (に)」に後に接続し、助詞として用いられるもので、「에 (に)」の他に「에게・한테 (に)」や「(으)로 (で)」などの格助詞とも結合する。(1) の「다가」のような助詞について、남기심・고영근 (1985:104) では、「体言の格を表す格助詞と異なり、別の意味を加える働きをする助詞を「補助詞」と言い、格助詞や副詞、連結語尾などにも結合することができるため、「特殊助詞 (이희승 1949)」と呼ぶこともある」と述べられている。他に、「後置詞 (임동훈 2004 等)」という分類もあるが、(1) のような「다가」の文法的位置づけは、本稿の考察範囲を超えているため、本稿では、(1) のような「다가」を남기심・고영근 (1985) にない、補助詞「다가」とする。

次に、(2) の「다가」は、「-아/어」に結合した形（以下、「-어다가」と表記）の連結語尾として用いられている<sup>1)</sup>。一方、(3) の「다가」は、「다가」の基本形である「다그다<sup>2)</sup>」という動詞に「오다（来る）」という動詞が結合し派生された「複合動詞」として用いられたものであり、(4) は、「다가」が「本動詞」として用いられた用例である。最後に (5) の「다가」は、語幹および「-으시（尊敬形語尾）、-었（過去形語尾）、-겠（推量形語尾）」に結合した形（以下、「-다가」と表記）の連結語尾である。

一見、形態的に同一形式のように見える「다가」であるが、(5) の連結語尾「-다가」は、(1) ～ (4) の「다가」との統語的および意味的な関連が少なく、同類の「다가」として分類し難いという見解が多い（김문웅 1982、김미희 2014 等）。特に同様に連結語尾として用いられる (2) のような「-어다가」が統語的な制約が多いのに対し、(5) のような「-다가」にはそのような制約がないなど、両形式を同一形式、あるいは、「-다가」が「다가」から派生された形式という見解（이남순 1996、이숙 2006 等）には、論証が不十分な点が多い<sup>3)</sup>。そのため、本稿では、(5) のような「-다가」は、(1) ～ (4) の「다가」とは別の形式としてみなし、考察対象外とする。

以下、本稿では、性質の異なる (5) のような連結語尾「-다가」を除き、(1) ～ (4) のように現れる「다가」を中心に「다가」の本質的意味・機能を考察する。本稿の考察対象をまとめると次の【表 1】の通りである。

【表 1】本稿の考察対象

分類	用例
補助詞「다가」	에 <u>다가</u> 、에게 <u>다가</u> 、한테 <u>다가</u> 、(으)로 <u>다가</u> 等
連結語尾「-어다가」	가져 <u>다가</u> 、데려 <u>다가</u> 、바래 <u>다가</u> 、사 <u>다가</u> 、끌어 <u>다가</u> 、 불러 <u>다가</u> 、찾아 <u>다가</u> 、주워 <u>다가</u> 等
複合動詞「다가」	<u>다가</u> 가다、 <u>다가</u> 들다、 <u>다가</u> 불다、 <u>다가</u> 붙이다、 <u>다가</u> 서다 、 <u>다가</u> 왔다、 <u>다가</u> 왔히다、 <u>다가</u> 오다 等
本動詞「다가」	<u>다가</u> 두어라、 <u>다가</u> 갔다 等

上記の (1) ～ (4) で見たように「다가」は「補助詞」「連結語尾」「複合動詞」「本動詞」という異なる文法的位置づけをもって現れ、それぞれの意味も「強調」「所有」「移動」「接近」という別の意味を持っている。しかし、従来の研究では、(1) ～ (4) のような「다가」を同一形式とみなしているにも関わらず、それぞれの意味・機能の間には有意義な関連が見られないという問題がある。それでは、上記の (1) ～ (4) のような「다가」に共通しているのは何であるかという疑問が沸く。本稿では、あるカテゴリーのメンバーにおいて共通している概念あるいはイメージを説明するために

は、「イメージ・スキーマ (image schema)」という認知的概念が有効であることに着目し、様々な意味・機能として現れる「다가」をイメージ・スキーマを導入し分析し、その本質的な意味・機能を明らかにしたい。

本稿の構成は、次の通りである。2節では、先行研究を検討し、問題点を探る。3節では、本稿の理論的枠組みと研究方法を述べる。そして、4節では、「다가文」と「非다가文」との違いから「다가」のイメージ・スキーマを提示し、5節では、「다가」のイメージ・スキーマがどのように事例化し意味拡張されるかを考察する。最後に、6節では、結論を述べる。

## 2. 先行研究及び問題点

「다가」に関する先行研究は、主に、①「다가」の起源及び文法的位置づけを考察したものと、②「다가」の通時的変遷を分析し、その文法化の過程を考察したものであるという2つに分けられる。以下では、それぞれの先行研究を検討した後、それらの研究の問題点を探る。

### 2.1 「다가」の起源及び文法的位置づけに関する先行研究

#### 2.1.1 「다가」の起源

「다가」の起源について、김문웅 (1982) は、次の (6) のように述べている。

##### (6) 「다가」の起源

中世韓国語において「다가」は、目的語を支配する他動詞であり、その意味は、「가지다 (持つ)」である。これは、漢文訳書において「가지다 (持つ)」「잡다 (手にとる、握る、つかむ)」という意味を持つ「把」「將」に「다가」が対応されていることから分かる。(김문웅 1982:158-159)

他の先行研究においても「다가」の語源的意味が「持つ」であることには、異見がないようである。が、「다가」の基本形については、主に次の (7) のように3つの見解があり、議論が進んできた。

##### (7) 「다가」の基本形に関する3つの見解

- ① 「다그다」 (정인승 1956)
- ② 「닥다」 (최현배 1956, 1960)
- ③ 「다ㄴ다」 (한운용 2003)

これについて전후민 (2014) では、上記の3つの見解は、いずれも「類似した語 (「다그치다 (せき立てる)」「닥치다 (迫る)」など) との関連性か

ら類推しただけであって、これまで知られている文献からはその基本形を明確することは困難である（전후민 2014:32）」と述べている。その上、現代韓国語において「다가」の基本形は「다그다」としているため、本稿でも전후민（2014）にならい、「다그다」を「다가」の基本形とする。

### 2.1.2 「다가」の文法的位置づけ

「다가」の文法的位置づけに関する先行研究では、主に連結語尾の「-어다가」と「-다가」を別の形式として見るか、あるいは、両者を同一形式として見るかという2つに分けることができる。

#### ① 「-어다가」と「-다가」を別の形式としてみなす見解

「-어다가」と「-다가」を別の形式として見る先行研究としては、최현배（1956, 1960）、정인승（1956）、김문웅（1982）、김미희（2014）などがある。これらの先行研究では、「-어다가」と「-다가」は統語的制約や意味・機能が異なる点と、「-어다가」と「-다가」は中世から独自の文法的位置を確立していたという点から、両形式を別の形式としてみなしている。特に김미희（2014）では、「-어다가」と「-다가」は、通時的にも共時的にも統語的に主語や述語の制約があり、否定のスコープにおいて異なる特徴が見られる他、意味・機能においても、基本的に「転換」という意味を持つ「-다가」は、「所有」という意味を持つ「-어다가」とは異なる（김미희 2014:189）」と述べている。

これまで先行研究において明らかになった「-어다가」と「-다가」の統語的制約や意味・機能の違いを簡単にまとめると【表2】の通りである。

【表2】先行研究における「-어다가」と「-다가」の違い

	「-어다가」	「-다가」
統語的制約	述語に他動詞のみが使用可能	特にない
結合形態	아/어	語幹 -(으)시（尊敬形語尾） -았/었（過去形語尾） -겠（推量形語尾）
意味	所有・移動	転換・中断・因果・条件
文法的位置づけ	連結語尾・補助詞・特殊助詞	連結語尾

【表2】で分かるように、「-어다가」は述語として他動詞のみが用いられるという制約があるのに対し、「-다가」にはそのような制約はなく、自動詞や形容詞を含め、全て述語と結合することができる。また、「-어다가」と「-다가」が結合する形態も、前者は「아/어」形のみであるのに対し、後者



は「語幹」や「先語末語尾」類に結合するという点が異なる。他に、「所有」「移動」という「-어다가」の意味と、「転換」「中断」「因果」「条件」という「-다가」の意味との間に関連性が見られないのも両形式を別の形式とみなす理由の一つである。最後に、文法的位置づけにおいても両形式の差があり、「-어다가」の場合、「連結語尾」の他、格助詞の後ろにつき、別の意味を加える働きをするという補助詞「다가」と同様、「補助詞」「特殊助詞」の位置づけを持っている点が連結語尾「-다가」とは異なる。

このように「-어다가」と「-다가」を別の形式として見る見解が主流となっている一方で、両形式を同一形式として見る見解もある。

## ② 「-어다가」と「-다가」を同一形式としてみなす見解

「-어다가」と「-다가」を同一形式として見る先行研究としては、이남순 (1996)、이숙 (2006)などが挙げられる。これらの先行研究では、「-어다가」や「-다가」は、いずれも「가」を省略することができるということで共通しており、「-다가」の起源も「-어다가」と同様、「移動」「接近」を表す述語である「다그다」から派生した (이숙 2006:237-238)」と述べている。特に이숙 (2006)では、「-어다가」の「空間的・時間的移動」という意味が「-다가」の前件の事態と後件の事態へと転換するという意味に反映されている (이숙 2006:234-237)」と述べている。しかし、이숙 (2006)で言う「다그다」が「移動」「接近」を表すということには疑問が残る。なぜなら、「移動」や「接近」のような「다그다」の意味は現代になってから現れたもので、もし「-다가」の起源が「-어다가」と同様に「다그다」であるのなら、それは、中世韓国語の「다가」の語源的意味である「持つ」と意味的関連を持っていなければならない。が、「-다가」の「転換」などの意味には中世韓国語の「다그다」の「持つ」という意味との関連は見られない。また、「다그다」が目的語をとる他動詞であるがために、「다그다」から由来した「-어다가」も述語に他動詞しか用いられないという統語的制約があるのに対し、「-다가」にはそのような統語的制約がなく自動詞も用いられるという点も「-다가」を「-어다가」と同じ語源を持つ同類の形式とみなしにくい点であろう。実際、中世韓国語において「-어다가」には、「(을) 다가」の形で、他動詞としての「다그다」の意味・機能が残っている用例が見られる。「-어다가」のみならず、格助詞に「다가」が結合する「-에다가」や「-로다가」にも「-에 (을) 다가」や「-로 (을) 다가」という用例が見られる。つまり、冒頭であげた (1) ~ (4) の「다가」は、いずれも「다그다」という語源から由来したと考えてよいものである。それに対し、「-다가」は、中世以前から「転換」という意味として用いられている他、それ以前に「(을) 다가」の形が用いられたか否かの確認は困難であり、本稿の考察範囲を超えているため、「-어다가」と「-다가」との関係についての考察は今後の課題

とし、本稿では、김문웅 (1982) や김미희 (2014) などと同様、「-다가」は「-어다가」とは別の形式とみなし、考察対象外とする。

## 2.2 「다가」の文法化過程に関する先行研究

「다가」の通時的変遷を分析し、その文法化の過程を考察した先行研究としては、전후민 (2014)、김미희 (2014) などがある。これらの先行研究では、中世から現代以降の韓国語において「다가」の用例を考察し、次の【表 3】のように文法化されたと述べている。

【表 3】「다가」の文法化過程 (전후민 2014:60-61 (30) 参照)

「다가」	中世	近代	現代	現代以降 <sup>4)</sup>
本動詞	(을) 다가 《動詞→助詞》 【意味の漂白】	徐々に消滅  다가()서다 出現 《動詞句》 【近接】	을 다그·再出現 《動詞》 【近接】  다가서다 《複合動詞》 【近接】	徐々に消滅  다가서다 《複合動詞》 【近接】
補助詞	에 (을) 다가 로 (을) 다가 에게 (을) 다가 《動詞→助詞》  【意味の漂白】	에다가 로다가 에게다가 《助詞》  【近接・強調】	에다(가) 로다(가) 에게다(가) 《助詞》  【近接・強調】	에다(가) 로다(가) 에게다(가) 《助詞・語用論的 標示》  【強調】
-어다가	-어 다가 《補助用言》  【維持・所有】	-어 다가 《補助用言》  【維持・所有】	-어다(가) 《連結語尾》  【維持・所有】	-어다(가) 《連結語尾・ 相的標示》  【維持・所有】

無印：各時期現れた「다가」の形態

《》：各時期の「다가」の文法的位置づけ

【】：各時期の「다가」の意味

【表 3】は、本動詞、複合動詞、補助詞、連結語尾「-어다가」がそれぞれどのような形と意味で変化してきたかを表している。【表 3】を見ると、中世以前に「持つ」という意味を持っており、他動詞として用いられた「다가」は、中世の時期に「意味の漂白化 (meaning bleaching)<sup>5)</sup>」によって動詞としての位置を失っている。但し、「-어다가」に関して 전후민 (2014) では、「中世の時期から「다가」そのものに目的語を直接伴わない「-어다가」

の形しか現れていないため、「-어다가」の意味の漂白化は、中世以前に起きた可能性が高いと考えられる（전후민 2014:37, 60）」と述べている。

ここで一つ、興味深いのは、「(을) 다가」という本動詞から「다가서다（近寄る）」のような複合動詞が派生された近代の時期に、「持つ」という意味を持っている本動詞としての「다가」は徐々に消滅するが、現代になって「다가」の本来の「持つ」という意味とは別の「近接」という意味を持っている本動詞としての「다가」が再出現するということである。この点について전후민（2014）は、「近代において本動詞「다그-」が複合動詞の形でしか現れず「을 다그-」の形では現れなくなり、複合動詞の「다가」の「近く（近接）」の意味がより確立されていくうち、「近くに～する」という意味を持つ本動詞「다그-」に逆形成(back-formation)される現象が起きた(전후민 2014:55)」と述べている。そのため、同じ本動詞としての「다가」でも、中世韓国語の「을 다가」と現代韓国語の「을 다가」は区別する必要があると思われる。

同じく「다가」の通時的変遷を考察した김미희（2014）でも、【表 3】のような전후민（2014）の「다가」の形態的变化と類似した見解を示しているが、「-어다가」の基本的意味を「所有」を前提にして先行節の対象が後行節の材料または手段として用いられる」と述べているという点が、전후민（2014）とは異なる。

### 2.3 「다가」の先行研究の問題点

2.2 では、「다가」の先行研究を、「다가」の起源や文法的位置づけに関するものと、「다가」の文法化の過程に関するものという 2 つに分けて検討した。その中でも従来の「다가」の研究は、「-어다가」と「-다가」を別の形式としてみなすか、それとも同一形式としてみなすかという「다가」の文法的位置の突き止めに目的とする先行研究が非常に多いのに対し、「다가」の意味・機能についての考察は少ない。特に「-어다가」と「-다가」が文法的に同じ範疇であるか、別の範疇であるかという問題はさておき、様々な文法的位置づけをもって現れる「다가」が、各々どのように意味的な関連を持っているかについての説明も不十分である。「다가」は補助詞、連結語尾、本動詞、複合動詞など、多様な文法的位置づけとして現れるだけに、その意味・機能も様々である。このような「다가」の意味について先行研究の見解をまとめると、次の【表 4】のようになる。

【表 4】 先行研究における「다가」の意味

文法的位置づけ	意味
補助詞	強調
連結語尾「-어다가」	所有（전후민 2014 等）、移動（이숙 2006）
複合動詞	接近
本動詞	接近

【表 4】で分かるように、補助詞として用いられる「다가」は「強調」、複合動詞や本動詞としての「다가」は「接近」という意味を持ち、連結語尾「-어다가」は「所有」や「移動」という意味を持つと言う。しかし、このような先行研究における「다가」の意味分析には大きく 2 つの問題点がある。

第一の問題点は、「強調」「所有」「移動」「接近」といった「다가」の意味は、「다가」の語源的意味である「가지다（持つ）」という意味とは、有意義な関連が見られないという問題である。また、多くの先行研究において挙げている連結語尾の「-어다가」の「所有」という意味も、一見、「다가」の語源的意味の「持つ」という意味と関連があるように見えるが、現代韓国語において「-어다가」に「所有」の意味がどのように現れているかについての説明は殆どない。その中、「-어다가」の意味を「所有」ではなく「移動」と見ている이숙（2006）の見解は、「다가」文を意味解釈する際、動作の対象が移動するというイメージが生じるという点で、本稿の「다가」文の意味解釈と類似している点はあるものの、「移動」という意味が「다가」の語源的意味とは関連が少ないという点では、他の先行研究と同様の問題点があると言える。他に、補助詞として用いられる「다가」の「強調」という意味についても、「다가」が何をどのように強調しているかについての説明が不十分であるという問題もある。

第二の問題点は、補助詞、連結語尾、本動詞、複合動詞という文法的位置づけを持っている「다가」の起源は、いずれも「가지다（持つ）」「잡다（手にとる、握る、つかむ）」という意味を持つ「把」「將」に由来しているといながらも、そこから派生したそれぞれの意味の間では関連が見られないという問題である。この問題は、第一の問題点に起因しているもので、先行研究で言う「強調」「所有」「移動」「接近」といった「다가」の意味と「다가」の語源的意味との間に関連が見られないがゆえに、各々の意味の間でも関連が見られなくなったと思われる。

先行研究におけるこの 2 つの問題点は、結局のところ、「다가」の本質的な意味・機能についての考察が不十分であることを示唆している。本稿では、この 2 つの問題点を解決するため、「다가」の文法的位置づけや通時的変遷を考察してきた従来の研究とは観点を変えて、文法的位置づけが異なる 4 つの「다가」文に共通しているイメージは何か、そして、そのイメージは「다가」



の語源的意味である「持つ」という意味とどのような関係しているかという観点から「다가」を考察したい。そのため、本稿では、あるカテゴリーのメンバーに共通しているイメージを説明するのに有効なイメージ・スキーマという認知的概念を導入し、「다가」を分析する。それによって、「다가」の本質的な意味・機能が明らかになると考えられる。

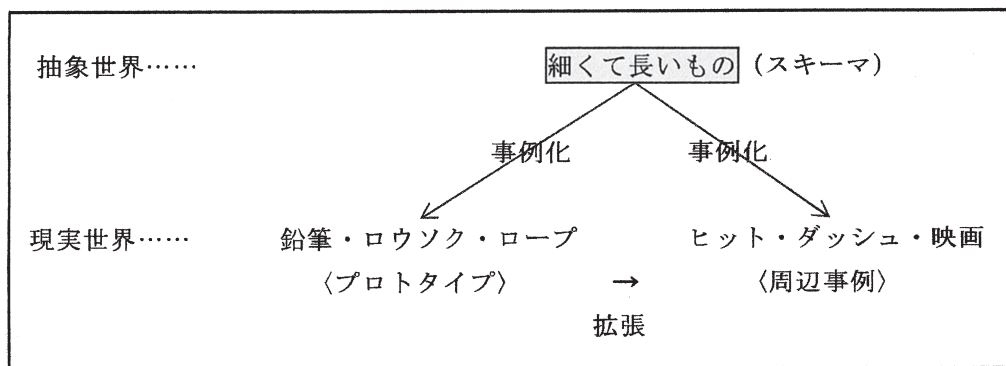
### 3. 理論的枠組み及び研究方法

2節で見た従来の研究では、異なる文法的位置づけをもって現れる「다가」の本質的な意味・機能についての考察が不十分であるという問題点を指摘した。その問題点を解決するために、本稿では、イメージ・スキーマを用いて、「다가」の意味・機能を考察していくが、その前に、本節では、まず、本稿の理論的枠組みとなる「イメージ・スキーマ」について概観した後、「다가」をどのように考察するかという研究方法について述べておく。

#### 3.1 イメージ・スキーマ

スキーマとは、「人が経験から身につける知識のまとまりであり、抽象的な世界である。そして、それは、ことばで表現せず、頭にイメージしたスキーマであるため、イメージ・スキーマ」と呼ぶ(辻 2003:87、吉村 2004:50)。

例えば、吉村(2004)では、日本語の「本」という数え方について、次の【図1】のようなスキーマ・モデルを提示している。



【図1】「本」のスキーマ・モデル (吉村 2004:51 図(2))

「鉛筆」「ロウソク」「ヒット」「映画」などは、「本」という単位で数えるカテゴリーに属しているものである。そして、「本」で数えられるものに対してイメージできるのは、「細くて長いもの」であり、それが、「本」のイメージ・スキーマである。一方、「鉛筆」や「ロウソク」は、「細く長いもの」というスキーマが最も顕著に現れている事例ではあるのに対し、「ヒット」や「映画」は実際目に見える具体的なものではなく、「細くて長いもの」と



いうイメージのみが残っている事例である。これについて吉村 (2004:47-54) では、「スキーマが最も顕著に現れる事例を「プロトタイプ (prototype)」と言い、プロトタイプは、あるカテゴリーの中の代表例であり、認知的な際立ちが高い事例である。それに対し、「周辺事例 (peripheral example)」とは、プロトタイプほど顕著ではないがスキーマが一部あるいはかすかに残っている事例である」と述べている。

つまり、スキーマとは、あるカテゴリーに属するメンバーに共通している抽象的な概念であり、それは現実世界に具体的な事例として事例化される。そして、そのスキーマが最も顕著に現れる事例が「プロトタイプ」、スキーマの一部が現れる事例が「周辺事例」であると言える。

### 3.2 研究方法

「다가文」は、「다가」を省略しても文の命題内容は変わらない。つまり、「다가」の使用は必須ではないということである<sup>6)</sup>。例えば、次の (8a) と (8b)、(9a) と (9b) とでは、「다가」が省略されても文全体の命題内容は変わらない。

(8) a. 가방을 테이블에 다가 놓았다.

b. 가방을 테이블에  $\Phi$  놓았다.

(かばんはテーブルに置いた。)

(9) a. 인수가 순이에게 시장에서 꽃을 사 다가 주었다.

b. 인수가 순이에게 시장에서 꽃을 사  $\Phi$  주었다.

(インスがスニに市場で花を買ってあげた。)

(8) の場合、「かばんをテーブルの上に置いた」という命題内容、(9) の場合は「インスがスニに市場で花を買ってあげた」という命題内容は変わらない。但し、(8) や (9) の「다가文」と「非다가文」とでは、動作の対象となる物体の位置関係にニュアンスの違いが生じる。例えば、「다가」が用いられた (9a) の場合、「インスが花を買った場所」は「市場」であるが、「スニに花をあげた場所」は「市場」ではないというニュアンスがある。それに対し、「다가」が用いられていない (9b) にはそのようなニュアンスは帯びない。「다가文」と「非다가文」においてこのようなニュアンスの差があるということは、「다가」の本質的な意味・機能を探るのに重要な手がかりとなると考えられる。そのため、次節では、まず、「다가文」と「非다가文」の違いを考察することで、「다가」のイメージ・スキーマと「다가」の基本的な意味を探る。そして、5 節では、「다가」のイメージ・スキーマを基に、「다가」がプロトタイプから周辺事例へとどのように意味拡張されて

いるかを考察する。これにより、多様な意味・機能として現れる「다가」の本質的な意味・機能が明らかになると思われる。

#### 4. 「다가」のイメージ・スキーマ

##### 4.1 「다가文」と「非다가文」の違い

「다가文」と「非다가文」の違いを探るために、次の(10)～(11)の用例において「인스가花を買った場所」と「스니に花をあげた場所」が「다가」の使用有無と如何に関わっているかを考えてみたい。ここでは、「에게(に)」という格助詞の後に補助詞としてと、「사(買って)」という語尾の後に連結語尾としてという2か所に「다가」の使用有無と意味解釈との関係を確認する。

(10) a. 인수가 순이에게  $\Phi$  시장에서 꽃을 사  $\Phi$  주었다.

(인스가스니に市場で花を買ってあげた。)

b. 인수가 같이 있는 순이에게 다가 시장에서 꽃을 사  $\Phi$  주었다.

(인스가一緒にいる스니に市場で花を買ってあげた。)

c. 인수가 집에 있는 순이에게 다가 시장에서 꽃을 사  $\Phi$  주었다.

(인스가家にいる스니に市場で花を買ってあげた。)

(11) a. 인수가 순이에게  $\Phi$  시장에서 꽃을 사 다가 주었다.

(인스가스니に市場で花を買ってきてあげた。)

b. 인수가 같이 있는 순이에게 다가 시장에서 꽃을 사 다가 주었다.

(인스가一緒にいる스니に市場で花を買ってきてあげた。)

c. 인수가 집에 있는 순이에게 다가 시장에서 꽃을 사 다가 주었다.

(인스가家にいる스니に市場で花を買ってきてあげた。)

(10a)～(11c)の例文において、「인스가花を買った場所」と「스니に花をあげた場所」をまとめると次の【表5】の通りである。

【表 5】「다가」の使用有無による場所の違い

例文	10a	10b	10c	11a	11b	11c
インスが花を買った場所	市場	市場	市場	市場	市場	市場
スニに花をあげた場所	市場	別の場所	別の場所	別の場所	別の場所	別の場所
「다가」の使用	×	○	○	○	○	○

【表 5】で分かるように、「インスが花を買った場所」と「スニに花をあげた場所」が同じであるのは、「다가」が全く用いられていない (10a) のみである。それに対し、補助詞であれ連結語尾であれ、「다가」が一つでも用いられている (10b) ～ (11c) の例文の場合、「インスが花を買った場所」と「スニに花をあげた場所」は別の場所である。つまり、「다가」文の使用には、動作の対象となる物体、即ち、(10) ～ (11) の場合、「花」が、最初にあった場所とは別の場所にあるという意味が含意されている。このように「다가」文の場合、「花」が存在する場所が変わるため、従来の研究では、「다가」の意味を「移動」ととらえる見解があった。特に、이숙 (2006) では、「다가」の意味が従来の研究で言う「所有」だと「다가」文と非「다가」文の違いを説明できない」と述べ、「-어다가」の「다가」は非移動動詞の前で付加語の修飾を受けながら、動作の対象 (目的語) を移動させる他動性の動きを表す本動詞 (이숙 2006:233) であると述べている。しかし、「다가」の意味が本当に「移動」であるかについては疑問が残る。なぜなら、「다가」の起源は「잡다 (手にとる、握る、つかむ)」「가지다 (持つ)」という意味を持っている「把」に由来していると言う (김문웅 1982:158-159)。それは、つまり、「다가」の語源的意味は「所有」である。が、이숙 (2006) で言う「移動」という意味は、「다가」の語源的意味の「所有」とは関連が少ない他、次の (12) のような例文においての「다가」の使用を上手に説明できないという問題が生じる。

(12) 타로를 찾아다가 혼내주었다.

(太郎を見つけてとちめてあげた。)

(12) の場合、「찾다 (探す、見つける)」という動作の対象は「太郎」であるが、実際、太郎を見つけるために移動するのは、「太郎」ではなく「話者」である。

本稿では、「다가」の基本的な意味は、その語源的意味である「가지다 (持つ)」が持っている「所有」にあると考えている。「所有」しているということは、その対象が「存在」しているということを表している。それは、次の

(13) の例文からも分かる。

(13) a. 나는 돈이 있다. (私はお金がある。)

b. I have money.

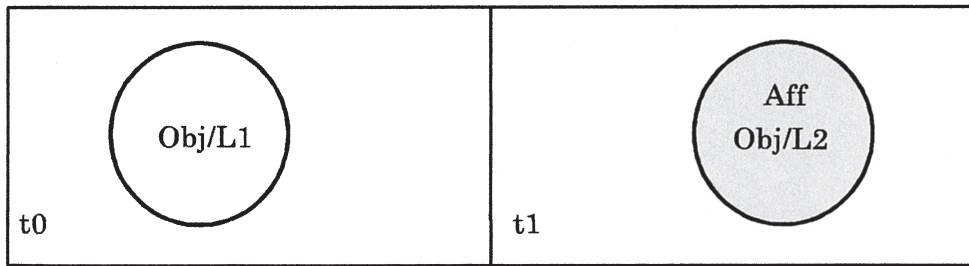
英語での所有を表す「have」は、韓国語では存在を表す「있다 (ある)」で現れる。つまり、所有と存在は相通ずるものであると言える。そのため、「다가」の基本的意味は「所有」を基にした「存在」であると考えられる。そして、上記の (10b) ～ (11c) において、「다가」が用いられた文の意味解釈には、最初の場所 (L1) の市場で「所有」し「存在」していた対象 (Obj) の「花」が、それと異なる別の場所 (L2) に「存在」するということが含意されている。

このように「다가」の基本的意味を「存在」とすると、(12) のような「다가」の使用も説明できるようになる。つまり、(12) の場合、이숙 (2006) の指摘のように「다가」の修飾を受ける述語の対象 (目的語) である「太郎」が「移動」するのではなく、「다가」の使用により「話者」が存在している場所が変わることで、太郎の相対的な位置が L1 から L2 へと変わるだけであるということである。

その上、従来の研究で言う「強調」「移動」「接近」などの「다가」の意味は、「다가」の語源的意味である「所有」とは関連が少なく、動作の対象が存在する場所が変わった結果としてとらえることは可能であっても、「다가」そのものが「強調」や「移動」「接近」などのような意味を表しているとは考え難い。以上の点から、「다가」の基本的意味は「存在 (所有を前提)」とみなすのが最も妥当であると考えられる。

## 4.2 「다가」のイメージ・スキーマ

前節の 4.1 では、「다가」文と非「다가」文の違いから、「다가」の基本的意味を「存在」と定義し、「다가」文の意味解釈には、動作の対象となる物体 (Obj) が最初の場所 (L1) とは別の場所 (L2) に存在することが含意されていると述べた。その含意が「다가」文に対して浮かぶスキーマであろう。従って、ここでは、「存在」という「다가」の基本的な意味と「다가」文の意味解釈から「다가」のイメージ・スキーマを次の【図 2】のように提示する。



【図 2】「다가」のイメージ・スキーマ

Obj (Object) : 動作の対象

L1 (Location1) : Obj が最初に存在していた場所

L2 (Location2) : Obj が「다가」の使用により存在する場所

Aff (Affected) : Obj が L2 に影響を及ぼす範囲

t0, t1 : 時間軸 (t0 から t1 へと時間が経過)

【図 2】で示したように「다가」のスキーマは、「다가」の使用により、時間 (t0, t1) を軸にして動作の対象となる物体 (Obj) が最初に存在していた場所 (L1) とは別の場所 (L2) に存在しているというイメージである。つまり、【図 2】は、t0 のときは L1 に存在していた Obj が、t1 のときは L2 に存在していることを表している。そして、Obj がある場所に影響を及ぼす範囲 (Aff) は L2 だけであるため、Obj の L2 への密着度が高く、Obj は L2 の周辺ではなく、L2 そのものに存在していることを表している。

## 5. 「다가」の意味拡張

3 節で述べたようにスキーマが最も顕著に現れる事例を「プロトタイプ」、スキーマが意味拡張 (meaning extension) してスキーマの一部あるいはかすかに残っている事例を「周辺事例」と言うと述べた。本節では、「다가」の用例を用いて「다가」のプロトタイプと周辺事例を分析する。

### 5.1 「다가」のプロトタイプ

ある動作の対象 (Obj) が最初に存在していた場所 (L1) とは別の場所 (L2) に存在していることを含意するという「다가」のスキーマが最も顕著に現れる事例としては、格助詞「에 (に)、에게 (に)、한테 (に)」の後ろにつく補助詞の「다가」と、連結語尾「-어다가」という 2 つがあげられる。以下では、それぞれを順に見ていく。

まず、次の (14) ~ (17) は、格助詞「에 (に)、에게 (に)、한테 (に)」の後ろにつく補助詞の「다가」の用例である。



(14) 가방은 테이블에다가 놔 뒀.  
(かばんはテーブルに置いといて。)

(15) 그 사실을 엄마한테다가 일러바쳤다.  
(その事実を母に告げ口をした。)

(16) 기본급에다가 수당도 붙는다.  
(基本給に手当もつく。)

(17) 명품 옷에다가 명품 가방에다가 매일 카드를 긁어대니 돈이  
모일리가 있나?  
(ブランド服に、ブランドカバンに、毎日クレジットカードを使い  
まくるからお金がたまるはずがない。)

(14) や (15) の「다가」文は、「置く」「告げ口をする」という動作の  
対象 (Obj) の「かばん」「その事実」が最初の場所 (L1) とは別の場所 (L2)  
である「テーブル」「母」に存在していることが含意されている。(15) の  
場合、「告げ口をする」という動作の対象である「その事実」は具体的な物  
体ではない抽象的なものではあるが、それが最初に存在していた場所の「話  
者」とは別の場所である「母」に存在するという「다가」のスキーマは顕著  
に現れている。また、(16) や (17) の「다가」文の場合も「つく」「使う」  
という動作の対象である「手当」や「カード」が最初の場所とは別の場所の  
「基本給」「ブランド品」に存在するというイメージは、「다가」のスキーマ  
が顕著に現れている例であると言える。(14) ～ (17) のように格助詞「に」  
と結合した補助詞「다가」のスキーマの各要素がどのように現れているかを  
まとめると、次の【表 6】の通りである。

【表 6】格助詞「에」+ 補助詞「다가」のスキーマ要素

用例	Obj	L1	L2	Aff
(14)	かばん	not L2	テーブル	L2 全体
(15)	その事実	not L2	話者	L2 全体
(16)	手当	not L2	基本給	L2 全体
(17)	カード	not L2	ブランド品	L2 全体

このように「다가」が格助詞「に」に結合した「에다가 (に)」の辞書的  
意味は、次の (18) の 2 つの意味があると書かれている。

### (18) 「에다가 (に)」の意味

- ①位置を表す。
- ②加わる対象を表す。

【標準国語大辞典 2008】

そして、そのときの「다가」は、「格助詞の意味をよりはっきりさせ、強調する」という補助詞として働いていると述べられている。補助詞としての「다가」が「強調」の意味を持つことには疑問が沸く。なぜなら、補助詞「다가」の意味が本当に「強調」であれば、先行する格助詞を強調するだけであるため、述語の制約などは関係ないはずであるためである。が、次の(19)のように他動詞以外の述語の場合、「다가」の使用は非文になる。

### (19) \*가방은 테이블에 다가 있다.

(かばんはテーブルにある。)

先行研究でも指摘されたように、「다가」の使用に、述語として「他動詞のみ」が可能であるという制約があるのは、「다가」の使用には文全体の意味解釈が関わっており、それは本稿で提示した「다가」のスキーマが現れないと「다가」は用いられにくいためであると考えられる。

「位置を表す」という「다가」の意味に対し、「加わる対象を表す」という意味は、何かが何かに加わるということは、ある物体が最初の場所とは別の場所にあることを表しているため、「다가」のスキーマを満たしている。そのため、この意味での「다가」の使用は自然である。

次の(20)～(24)は、「-어다가」の形で連結語尾として用いられた「다가」の用例である。

### (20) 창문에는 꽃병을 가져다가 놓았다.

(窓には花瓶を持ってきて置いた。)

### (21) 타로를 공항까지 바래다 주었다.

(太郎を空港まで送ってあげた。)

### (22) 어떻게 된 건지 알아봐다 주세요.

(どうしたことなのか調べてみてください。)

### (23) 빌빌대던 절 어르신이 주워다 사람 만드신 거죠.

(ぶらぶらしていた私を親分が拾って一人前にしてくれました。)

(24) 타로를 찾아다가 혼내주었다.

(太郎を見つけてとちめてあげた。)

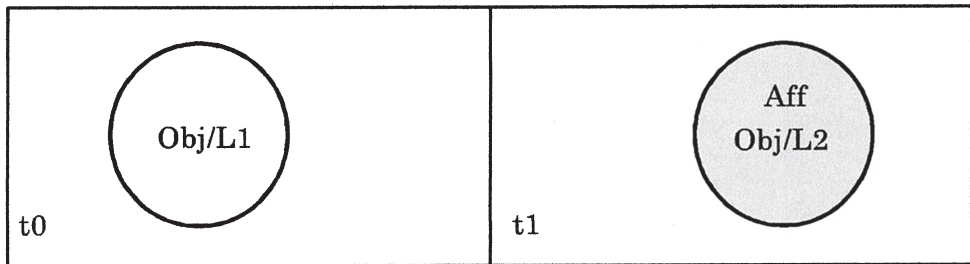
(20) ～ (24) の「다가」文は、いずれも、動作の対象 (Obj) が最初の場所 (L1) とは別の場所 (L2) に存在していることを含意している。(20) や (21) の場合は、動作の対象が具体的なもの (「花瓶」「太郎」) であるため、「다가」のスキーマの現れ方が最も分かりやすい。それに対し、(22) の「다가」文は、上記の (15) と同様、Obj (どうということ) が抽象的であるため、L1 と L2 が具体的な場所というより、話者ではないどこかに存在していた Obj が話者のところ (L2) に存在するということを含意している。また、(23) のように、L1 と L2 が空間的な位置関係を表すというより、「ぶらぶらしていた昔の私 (L1)」と「一人前の今の私 (L2)」という時間的な位置関係として現れることもある。最後に (24) の場合は、4.1 でも述べたように Obj である「太郎」の位置関係は、話者の位置関係によって相対的になるが、これも Obj が L1 とは別の L2 に存在するという「다가」のスキーマは十分現れている。

(20) ～ (24) の用例を見ると分かるように動作の対象である Obj は、具体的なものから抽象的なものまでカバーしている他、最初の場所の L1 や別の場所の L2 も具体的な空間的場所から時間的場所まで幅広い。が、Obj が具体的であれ抽象的であれ、L1 や L2 が空間的であれ時間的であれ、(20) ～ (24) の「다가」文は、Obj が最初の L1 とは別の場所である L2 に存在していることを表すという点には変わりがない。そのため、(20) ～ (24) の用例は、Obj が最初に存在した場所 (L1) とは別の場所 (L2) に存在しているという「다가」のスキーマが顕著に現れているプロトタイプの事例であると言える。(20) ～ (24) のように連結語尾「-어다가」のスキーマの各要素がどのように現れているかをまとめると、次の【表 7】の通りである。

【表 7】連結語尾「-어다가」のスキーマ要素

用例	Obj	L1	L2	Aff
(20)	花瓶	not L2	窓	L2 全体
(21)	太郎	not L2	空港	L2 全体
(22)	ことの詳細	not L2	話者のところ	L2 全体
(23)	私	ぶらぶらしていた昔	一人前の今	L2 全体
(24)	太郎	not L2	太郎を見つけたとき、 話者がいた場所	L2 全体

以上、「다가」のスキーマが最も顕著に現れる事例を考察した。「다가」の様々な文法的位置づけのうち、格助詞「に」につく補助詞「다가」と連結語尾「-어다가」は、いずれも動作の対象 (Obj) が最初の場所 (L1) とは別の場所 (L2) に存在していることが含意されるという「다가」のスキーマがそのまま現れているプロトタイプの事例であった。そして、その影響が及ぼす範囲 (Aff) は L2 全体であるため、Obj は L2 に密着して存在している<sup>8)</sup>。そのため、「다가」のプロトタイプは、【図 3】のように 4.2 の【図 2】で示した「다가」のスキーマと同様になる。



【図 3】「다가」のスキーマ (プロトタイプ)

## 5.2 「다가」の周辺事例－その 1

周辺事例とは、スキーマの一部あるいはかすかに残っている事例のことを言う。「다가」の周辺事例としては、次の (25) ～ (28) の用例が挙げられる。

(25) 타로가 옆으로 다가왔다.

(太郎がそばに近づいてきた)

(26) 아이들을 다가앉히고 이야기를 시작했다.

(子供たちを近くに座らせて、話を始めた。)

(27) 의자를 창 쪽으로 다가 두어라.

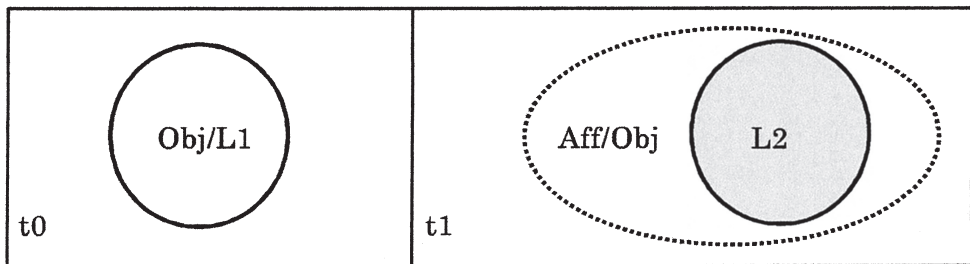
(椅子を窓の方へ近づけておいて。)

(28) 입주 날짜를 다졌다.

(入居日を早めた。)

(25) と (26) の「다가」は、それぞれ「来る」と「座らせる」という動詞がつく複合動詞としての「다가」であり、(27) と (28) の「다가」は、本動詞として用いられた「다가」である。「다가」が複合動詞または本動詞

として用いられた場合も、動作の対象 (Obj) は最初の場所 (L1) とは別の場所 (L2) に存在していると意味解釈できるという点で「다가」のスキーマが現れていると言える。が、(25) ～ (28) の用例が「다가」のプロトタイプと異なる点は、Obj の影響が及ぼす範囲 (Aff) が L2 と完全に一致せず、L2 の周辺にとどまるという点である。そのため、プロトタイプと比べ、Obj と L2 との密着度が落ち、「다가」は Obj が L2 の「近く」に存在していることを表すように意味拡張される。このように周辺事例に拡張された「다가」のスキーマは、次の【図 4】のようになる。



【図 4】「다가」のスキーマ (周辺事例 1)

【図 4】を見ると、Obj の Aff は L2 の周辺に作用し、Obj が L2 に密着していないため、Obj が L2 の「近く」に存在している。そのため、(25) ～ (28) の「다가」の意味は「近づく」「近づける」などになるのである。また、(28) の場合、本動詞の「다가」は、入居日の本来の日程 (L1) から別の日程 (L2) の方に「変更した」のではなく、「早めた」という意味になる。

一方で、本来、言語変化のプロセスは、本来の語彙的意味を持っている本動詞から複合動詞あるいは別の意味・機能へと変化するのが一般的である。そのため、上記の (25) ～ (28) のように本動詞や複合動詞として用いられた「다가」が周辺事例であり、補助詞や連結語尾として用いられた「다가」がプロトタイプであるということは多少違和感が感じられる。が、전후민 (2014) では、本来、「을/를 (を)」を伴い「持つ」という意味を持っていた本動詞としての「다가」について、本動詞としての「을 다가」は、近代から次第に消滅していったが、「近くに」という意味をもって近代に現れた複合動詞の影響で、現代に再び現れるようになった (전후민 2014:55)」と述べている。但し、その意味は、「다가」の本来の「持つ」という意味ではなく、複合動詞と同様、「近く (近接)」であると述べている。つまり、一見、意味拡張のプロセスが逆のように見えるが、実際、(25) ～ (28) のような本動詞や複合動詞の「다가」の意味は、中世韓国語の本動詞の意味とは別の意味であるということである。



以上、(25)～(28)のように現代韓国語の複合動詞や本動詞として用いられる「다가」のスキーマの各要素がどのように現れているかをまとめると、次の【表 8】の通りである。

【表 8】複合動詞及び本動詞「다가」のスキーマ要素

用例	Obj	L1	L2	Aff
(25)	太郎	not L2	話者のところ	L2 の周辺
(26)	子ども	not L2	話者のところ	L2 の周辺
(27)	椅子	not L2	窓	L2 の周辺
(28)	入居日	not L2	別の日程	L2 の周辺

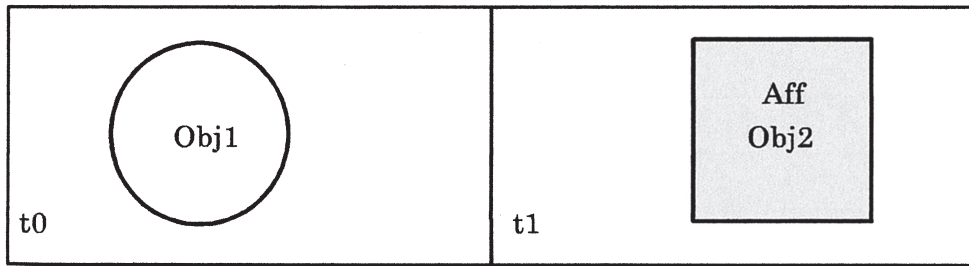
### 5.3 「다가」の周辺事例－その 2

次の用例を見てみよう。

- (29) 짚으로 다가 모자를 만들었다.  
(わらで帽子を作った。)

(29) は、道具・手段を表す格助詞「(으)로 (で)」に「다가」が結合したものである。(29) の場合の「다가」文は、「存在」という「다가」の基本的意味から、本来、「わら」として存在していたものが、今は「帽子」として存在していると意味解釈できる。そのため、(29) のような「다가」のスキーマは、「作る」という動作の対象 (Obj、この場合は材料) が L1 とは別の場所である L2 やその周辺に存在するというイメージではなく、動作の最初の対象 (Obj1) が別の対象 (Obj2) として存在しているというイメージになる。つまり、5.2 で見た「周辺事例 1」と異なり、最初に存在していた Obj の形が別の形として存在していることを表すように意味拡張されるということである。そして、この場合でも【図 2】で示した「다가」のスキーマはかすかに残っているため、(29) のような「다가」も「다가」の周辺事例と言える。

(29) のように格助詞「で」と結合した補助詞「다가」のスキーマとその各要素がどのように現れているかをまとめると、次の【図 5】と【表 9】の通りである。

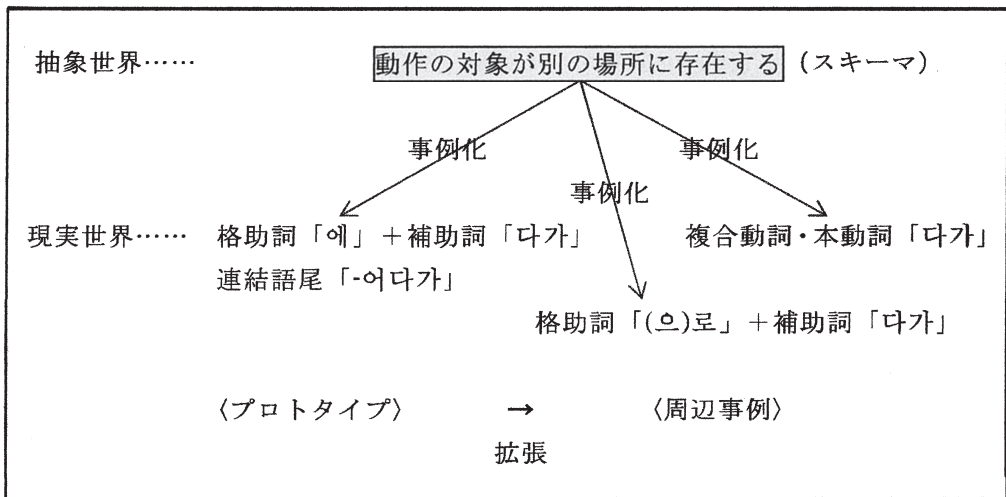


【図 5】「다가」のスキーマ（周辺事例 2）

【表 8】格助詞「で」＋補助詞「다가」のスキーマ要素

用例	Obj1	Obj2	Aff
(29)	わら	帽子	Obj2 全体

以上、本稿で考察した「다가」のプロトタイプとその周辺事例を基に「다가」のスキーマ・モデルを示すと、次の【図 6】のようになる。



【図 6】「다가」のスキーマ・モデル

【図 6】を見ると、「動作の対象が別の場所に存在する」という「다가」のスキーマが最も顕著に現れている「에다가」と連結語尾「-어다가」はプロトタイプで、スキーマが一部あるいはかすかに残っている複合動詞・本動詞としてもちいられた「다가」や「-(으)로다가」は周辺事例として事例化されている。また、「다가」の 2つの周辺事例は、1つの周辺事例からもう 1つの事例へと拡張されたのではなく、それぞれプロトタイプから意味拡張されている。

## 6. おわりに

本稿では、多様な意味・機能として現れ、様々な文法的位置づけを持っている「다가」に共通しているイメージをイメージ・スキーマという認知的概念を用いて分析し、「다가」の基本的な意味は「存在」であり、「다가」のイメージ・スキーマは、「動作の対象 (Obj) が最初の場所 (L1) とは別の場所 (L2) に存在する」ということであると述べた。このように「動作の対象が別の場所に存在する」という「다가」のスキーマから「다가」を考察すると、これまで関連が見られなかった「다가」の様々な文法的位置づけや、「強調」「移動」「接近」といった多様な意味について、統一的な説明が可能となる他、「다가」の基本的な意味を所有と相通ずる「存在」としているため、「所有」という「다가」の語源的意味も保持され、従来の研究にあった問題点をも解決できると思われる。

しかし、残された課題も少なくない。その1つが、本稿では別の形式としてみなし、考察の対象外とした連結語尾「-다가」である。本稿で考察したように「다가」のスキーマにおいて対象が存在する空間的な場所が時間的な場所や対象が存在する形などに意味拡張されるのなら、場所の概念が空間から時間へ、さらに事態へと拡張される可能性も否定できない。但し、2.1.2でも述べたように「-다가」は、一部の共通点を除き、その語源を含め、「-어다가」と同類形式として見なしにくい点が多いため、その考察にあてては注意が必要である。これについては今後の課題としたい。

### 《註》

- 1) 「-어다가」を「後置詞」とみなす見解 (김문웅 1982) もあるが、「-어다가」の文法的位置づけは、本稿の考察範囲を超えている他、先行研究において「-어다가」は連結語尾としてみなす見解が主流であるため、本稿でも、「-어다가」は連結語尾とする。
- 2) 「다가」の基本形については様々な見解がある。これについての詳細は 2.1.1 で後述する。
- 3) 「-어다가」と「-다가」の違いについての詳細は、2.1.2 で後述する。
- 4) 現代以降の「다가」の文法化は、전후민 (2014) の推論により、今後起こりうる「다가」の言語変化を予測したものである。
- 5) 意味の漂白化 (meaning bleaching) とは、本来持っていた語彙的で具体的な意味が希薄になるプロセスを言う (大堀 2002:189)。
- 6) 「가져다가 (持ってきて)」や「데려다가 (連れてきて)」など、「-어다가」の用例の一部においては、「다가」の使用が必須である例がある。が、これらの例を含め、「-어다가」の形は、その使い方を文献で確認できる中世以前に確立したとされるため、なぜこれらの例の「다가」は省略できないかについては類推するしかない。この点は、本稿の考察範囲を超えている他、「다가」の使用が必須である一部の例が本稿の論証に大きい影響

가及ぶものではないため、これについては今後の課題としたい。

7) (10b) を (10a) と同じ意味として解釈した場合、「다가」の使用は不自然である。

8) Obj が L2 に密着する度合いは、(14) の「가방은 테이블에다가 놔 뒤.」のように「かばん (Obj)」が「테이블 (L2)」に完全に密着している場合から、(24) の「타로를 찾아다가 혼내주었다.」のように「太郎 (Obj)」と「話者がいる場所 (L2)」がそれほど密着していない場合まで、連続的である。

#### 《参考文献》

##### <研究図書・論文類>

고영근(2009)『표준 중세국어 문법론』, 집문당.

김문웅(1982)「‘-다가’류의 문법적 범주」, 『한글』 176, 한글학회, 149-178.

김미희(2014)「연결 어미 ‘-다(가)’와 ‘-어다(가)’의 문법 체계상 위치에 대하여」, 『국어학』 71, 국어학회, 189-227.

김영희(1975)「‘-다-아서’에서 ‘다가’까지」, 『연세어문학』 6, 연세대학교 국어국문학과, 83-108.

남기심・고영근(1985)『표준국어문법론』, 탑출판사.

박용찬(2014)「중세국어 ‘다가’와 ‘-어 다가’의 문법화 : 「번역노걸대」 「번역박통사」와 「노걸대언해」 「박통사언해」의 비교를 중심으로」 『한국어학』 65, 한국어학회, 175-209.

백낙천(1996)「‘(-)다가’에 대하여」, 『동국어문학』 8, 동국어문학회, 213-230.

백낙천(2011)「조사 통합형 접속어미의 특징」, 『국제언어문학』 24, 국제언어문학회, 121-141.

오경진(2002)「연결 어미 ‘-어다(가)’」, 『외국어로서의 한국어교육』, 연세대학교 언어연구교육원 한국어학당, 205-218.

유경화(2013)「조사 ‘에다가’의 통사・의미적 연구」, 『어문학』 120, 한국어문학회, 31-54.

이기갑(2004)「-다(가)의 의미 확대」, 『어학연구』 40-3, 서울대학교 언어연구소, 543-572.

이남순(1996)「‘다가’攷」, 『이기문 교수 정년퇴임 기념 논총』, 신구문화사, 455-477.

이숙(2006)「‘다가’의 용법에 대하여」, 『한국어학』 32, 한국어학회, 213-239.

임동훈(2004)「한국어 조사의 하위 부류와 결합 유형」, 『국어학』 43, 국어학회, 119-154.

전후민(2014)「{다가}의 변천사」, 『우리말글』 63, 우리말글학회, 29-68.

정인승(1956)「“다그다”와 “다가”가 큰 사전에 어찌 실렸나?」, 『한글』 119, 한글학회, 115-121.

최윤(2016)「조사 ‘다가’의 문법적 위치 고찰 : 형태적 출현 제약을 중심으로」, 『한말연구』 42, 한말연구학회, 171-196.

최현배(1956)「안갠은 움직씨 “닥다”에 대하여 : “닥아”와 “다가”의 변」, 『한글』 118, 한글학회, 29-32.

최현배(1960)「다시 “닥다, 닥아, 닥이다”에 대하여」, 『한글』 127, 한글학회, 7~27.

최현배(1961) 『우리말본』, 정음문화사.

한용운(2003) 『언어 단위 변화와 조사화』, 한국문화사.

大堀壽夫(2002) 『認知言語学』, 東京大学出版会.

辻幸夫(2003) 『認知言語学への招待』, 大修館書店.

吉村公宏(2004) 『はじめての認知言語学』, 研究社.

Bowerman, M. and S. Choi (2001) Shaping meanings for language: universal and language specific in the acquisition of spatial semantic categories. In M. Bowerman and S. C. Levinson (eds.), *Language Acquisition and Conceptual Development*, pp.475-511. Cambridge University Press.

Hopper, P J. & Traugott, E C(1993) 『*Grammaticalization*』, Cambridge University Press.

Talmy, L(1985) Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms. In T. Shopen, (ed.), *Language Typology and Syntactic Description 3: Grammatical Categories and the Lexicon*, pp.36-149.

#### < 辞書類 >

국립국어원 (2008) 『표준국어대사전』, 국립국어원.



## 현대 한국어 ‘다가(taka)’의 이미지 스키마와 의미확장

이 영란  
도쿄대학

본 연구의 목적은 현대 한국어에서 다양한 의미 기능을 갖고 있는 ‘다가(taka)’를 이미지 스키마라는 인지적 개념을 사용하여 분석함으로써 ‘다가’의 본질적인 의미 기능을 명확하게 하는 데 있다.

선행연구에서 ‘다가’는 보조사, 연결어미, 복합동사, 본동사라는 문법적 범주를 가지고 ‘강조’, ‘이동’, ‘접근’ 등의 의미로 나타나지만, 이는 ‘다가’의 어원적 의미인 ‘가지다(소유)’와는 의미적 관련이 보이지 않으며, 각 문법적 범주나 의미 간의 관련성도 보이지 않는다는 문제점이 있다.

이러한 문제를 해결하기 위해 본 연구에서는 ‘다가’의 어원적 의미인 ‘소유’는 소유하여 ‘존재’한다는 의미와 상통한다는 점에 착안해 ‘다가’의 기본적인 의미를 ‘존재’로 보고, ‘다가문’과 ‘비(非)다가문’과의 의미해석의 차이를 통해 ‘다가’의 이미지 스키마를 ‘동작의 대상(Obj)’인 물체가 처음에 존재했던 장소(L1)와는 다른 장소(L2)에 존재한다’라고 정의하고 ‘다가’를 고찰했다.

그 결과 ‘다가’의 스키마가 가장 현저히 나타나는 ‘프로토타입’으로는 격조사 ‘에’에 ‘다가’가 결합한 보조사로서의 ‘다가’와 연결어미로서 사용된 ‘-어다가’가 있었고, 스키마의 일부가 남아있는 ‘주변사례’로는 복합동사와 본동사로서 쓰인 ‘다가’가 있었다. 동사로 쓰인 ‘다가’는 프로토타입과 마찬가지로 동작의 대상이 처음 장소와는 다른 장소에 존재하지만 그 존재가 미치는 범위가 L2 전체가 아닌 그 주변이라는 점에서 ‘가까이에(접근)’라는 의미로 의미 확장되었다고 할 수 있다. 또 다른 주변사례로는 격조사 ‘(으)로’에 ‘다가’가 결합한 보조사 ‘다가’가 있었는데, 이는 존재하는 장소가 아니라 어떤 한 사물로서 존재하던 것이 다른 사물로서 존재하게 된다는 의미로 의미 확장이 일어난 것으로 생각된다.

이로써 다양한 문법적 범주와 의미 기능을 갖고 있던 ‘다가’를 ‘존재’라는 기본적인 의미와 ‘대상이 다른 장소에 존재한다’는 스키마를 사용하여 ‘다가’의 본질적인 의미 기능에 대해 기존 연구와는 차별화된 보다 통일적인 설명이 가능해졌으며, 이는 ‘소유’라는 ‘다가’의 어원적 의미가 유지된다는 점에서 연구의 의의가 있다고 할 수 있겠다.